

鍛冶屋・主義者・豆腐屋（第二回）

— 吉田一氏のガムシヤラ人生 —

萩原晋太郎

第一回目次

吉高屋とは何ぞや
鍛冶屋のころ
木賃宿に育った闘士
寝台づくり
米騒動前後
ピンと大杉の軌跡
尾行づきに昇格
北風会の活躍
労働相談所
人力車夫志願

花見と演説会もら
平公登場
電気泥棒

大杉への叛逆

地震の絵

望月桂の生家は長野県明科である。

彼が二三歳の年、一九〇九年一月、近くの谷まで爆発音が聞えた。村人はエビス講の花火だろうと思っていたが、宮下太吉が試作した爆弾を岩に投げつけて破裂させたのであった。これが大逆事件のきっかけになった。宮下の下宿も、働いていた製材所も、望月の家の近くであった。

このできごとの衝撃から、彼は教職を捨てて東京に出、社会運動に投じるようになったのである。

望月の主宰する革命芸術研究会「黒耀会」は、一九一九（大正八）年、第一回展覧会を筑土八幡前の骨董品店を借りきってひらいた。翌年一月二三日から五日間、京橋の星製菓本社で第二回展覧会をひらいた。大変な人気であった。二五〇点あまりの出品のうち、警視庁は二四点を撤去させた。

初日に、吉田一は画用紙に地震でこわれたビル街の絵

を描き、「大杉栄」と題をつけて持込んだ。

「何だ、これは」

「大杉だよ。過激なことをいったり書いたりしているが、実際運動はしてないから、絵に描いた地震さ。ちっとも危くねえ」

ダルマ大師の望桂もこれには呆れて、折角の力作をお引取り願った。

「俺の苦心の名作を没にするのかよ」

ピンはブリブリしながら、それでも見物して帰っていた。

この年八月、アナ・ボル協同の「日本社会主義同盟準備会」が作られて以来、ピンの大杉に対する反感は相当根づよいものになっていた。

「労働者の自主自治」を説く大杉の逆手をとるようになるのである。

暴力団を脅かした下足番

動あれば必ず反動がある。一九一九（大正八）年、貴族院議員の磯部四郎を会長にして、「国粋会」が生まれた。

綱領の中で、こううたっている。

「万一、人為的に国家の安寧秩序を案さんとするもの

に対しては、これが撲滅を期し、吾人の趣旨を諒とする
何れの内閣をも援助する」

この別動隊「大和民労会」が二一（大正一〇）年一月
一五日に生れた。会長は河合徳三郎であった。

社会主義同盟有志の新年会が一月二一日、日本橋の常
盤俱樂部でひらかれた。例によって警察が干渉し、ゴタ
ゴタもめたが、ようやく開会の運びになった。国粋会と
民労会の数十人が目印の腕章をつけ、高張提灯をかかけ
木刀をぶらさげて会場の入口に勢ぞろいした。

遅れてきた界利彦、永田耀、北浦千太郎が入口で奴ら
の木刀と鉄拳を浴びて負傷した。

「野郎ら、衆をたのんで汚ねえことをしやがる」

吉田一は地団駄ふんでくやしがあった。

同じ日に芝白金町の相生亭で、加藤一夫らが自由人連
盟演説会をひらいた。民労会は五台の自動車でおしかけ
た。

演説がはじまると、民労会の子分どもは一せいに妨害
した。臨監警官は得たりとばかり「不穩につき解散を命」
じた。その帰り、松本淳三は民労会のふりまわした日本
刀に刺され、危篤の重傷を負った。

民労会は「浅草の新撰組」と名のり、社会主義撲滅を
スローガンに、あちこちの演説会や集会に日本刀をふり

まわしてなぐりこんでいた。

三月二日、「東宮渡御祝福のため」と、宮川町広場
に日当一円二〇銭で人夫二〇〇人をかりあつめた。明治
神宮まで行進し、演説を聞かせて万歳を三唱、ついで二
重橋前まで行進し、ヒゲをはやした何トカ先生の演説を
聞かせ、ここでは万歳を九唱させた。人夫の一人がこぼ
れていた。

「この前の普選反対のときには弁当つきで二円だったが、
今度は万歳一二回で歩かされて、一円二〇銭じゃワリが
あわねえ」

こうした状況から、社会主義団体の中で「赤衛団」を
組織しようという動きが生れてきた。

社会主義と労働運動の直結を進めるために、日本社会
主義同盟準備会が結成されたのは、一九二〇（大正九）
年八月五日であった。麴町の岩佐作太郎宅を事務所にし
て、機関誌『社会主義』を発行した。

川崎家演説会事件を機に、社会主義に目ざめた河本乾
次は自由人連盟に加入し、平民大学講演会に出たり、北
風会や労働組合研究会の常連になっていた。社会主義同
盟準備会の協議会にも出て、演説会のピラマキヤポスタ
ー貼りを手伝っていた。

ところが手ちがいで、一月の準備会集會通知が、彼
の勤め先の星製薬に送られてしまった。彼は即刻クビに
なった。

彼の職場はモルヒネの精製場であった。世間では入手
至難の高価な麻薬だが、その気になればいつでも持出す
ことができた。それだけにモルヒネ精製場の職工に対する
人事係の監視はとくにきびしかった。モルヒネを持出し
て社会運動の資金にされては大変だという懸念と、主義
者を麻薬部に入社させた責任を問われては大変だとの恐
れから、人事係は河本をクビにしたのである。あとでわ
かったことだが、人事係はクビを正当づけるために「河
本は工場内で発禁の出版物をひそかにくばっていた。ス
トを宣伝していた」などとデッチアゲのレポートを社長
に提出していた。

日本に革命近しの気運に燃えて、社会主義同盟は創立
大会を目前にひかえ、テンテコ舞いの最中だ。無名の一
青年の鹹首を問題にしていられなかった。それでも岩佐
は

「運動のかけには、いつも犠牲がともなりものだよ」

と河本をなぐさめ、大杉は

「すぐにも生活に困るんだから、会社から解雇料を取
ってやれ」と助言した。

河本は工場の人事係とかけあったがラチがあかないの
で、社長の星一とジカ談判しようとして、京橋ビルの本社に
何日も足をはこんだ。そのたびに、社長は台湾に行つて
いるとか、ドイツ大使館に行つたとか、内務大臣後藤新
平の官舎に行つたとかで、門前払いをくわされた。そし
て最後に、秘書から金一封を渡された。百円札が数枚は
入っているかと思つたら、たった十円札が五枚であった。
河本は食うに困つて、数日間職業紹介所にかよつたが、
仕事がなかった。暮から正月の二〇日ほど、三田郵便局
の臨時集配人になって飢えをしのいだ。

浅草の桂庵（私設の口入屋）にとびこむと、浅草観音
うらの蝶々料理店の下足番に周旋された。一月一七日、
住込んでから河本はおどろいた。蝶々の経営者は悪名高
い河合徳三郎で、女将はその妻であった。

△とんでもない所にとびこんだものだ。だが、民労会
の内情を知るのおもしろいだらう▽

そう思つて、神妙に働いていた。ある晩、表通りを吉
田一が二、三人つれだつて歩いてきた。吉田は大声で

「ああ、女郎買ひに行きてえなア」

といった。まさか、この店に入つてきはしないだらう
が、俺の顔を見られたらちよつとマズイな、と河本は思
つたが吉田らはそのまま通りすぎた。

二月二日、河合は「下足番いるか」とどなりながら、足音あらく妾のいる帳場に入って行った。

▲もうバレたか。ちよっと早すぎるが、くるものがきたわい▼

河本は肚をきめた。

徳三郎は河本を一室に呼びこんで坐らせると、四人の子分にとりかこまれた。

大きなテーブルを間に、徳三郎は三メートルほど離れて仁王立ちだった。河本が何かの拍子に手を動かしたり腰を動かしたりすると、徳はギョッとしてあとずさりする。そして両手を前につき出して

「前に寄るな、くるな」

血相変えてわめく。まるで河本がドスを抜いてとびかかるのを恐れるような態度である。プロレスラーのような巨漢で、全身にイレズミした大和民労会の大親分とは思えない小心な警戒ぶりであった。

「貴様は誰にたのまれて俺の寝首をかきにきた。大杉栄か、堺利彦か、お前はどっちの子分か……」

この異問には河本も困ったが

「誰にもたのまれはしない。また、誰の子分でもない。一度、下足番をやりたかっただけ……」

「ウソをつけ。かくしたってだめだぞ。たしかに俺の

寝首をかきにきたんだ」

だが押問答のうち、急に意外な話になった。

「お前たちはバクダンを所持しているそうだが、そのバクダンはどこから手に入れたのだ」

なぜ爆弾の話になったのか河本はわからなかったが、何とか調子を合わせてやろうと尤もらしくホラをついた。

「バクダンは鉾山の夫人に連絡をとってあって、工事用のダイナマイトをまわしてもらうことになっている」

すると、徳はニタリと薄気味わるい笑いを浮かべた。とたんに、隣の部屋にかくれていた警視庁の特高係が出てきて、河本を引っ立てた。

警視庁での取調べは寝耳に水だった。当時四二議会議院中で、衆議院の門前に爆弾が仕掛けられた事件があった。懸賞金まで出て捜査したが、犯人はつかまらなかった。その騒ぎの最中に、星製薬をクビにされた河本が忽然と姿をくらましたことになり、容疑者と目されたのである。きびしい探索のすえ、喋々の下足番になっていることがつきとめられた。これが河合の寝首をかきに潜入したと見られ、また河合の誘導訊問で河本が爆弾事件を白状したと見られたわけだ。

そのころ河本は毎日丹念に日記をつけていたのが幸いで、押収された日記で裏づけがとられ、三週間で釈放さ

れた。もし日記がなかったらアリバイを証明する記憶もなく、拷問されて爆弾事件犯人にデッチアゲられていた

だろう。

その後、彼は東京では食っていけなくなり、大阪にもどり南海電鉄の駅夫に就職して、労働運動に挺身した。

時移り世は変り、大和民労会は解散し、河合は西栗鴨に河合キネマをおこして社長におさまった。阿部九州男、水島道太郎、羅門光三郎、杉山昌三九、大山デブ子らの役者をかかえて、チャンバラ映画を作っていた。私が小生士のころだが、残念ながら見たことがない。同級生は「時代ものなのに、電信柱が写っているんだぜ」と笑っていた。この河合プロも一九三三（昭和八）年六月、新しくできた大都映画に買収されてしまった。

拘留された棍棒

皇紀二五八一年の紀元節を皮肉って、また休日でもあるので、一九二一（大正一〇）年二月一日午後一時、労働運動社は渋谷の新橋倶楽部で労働問題演説会をひら

した。

例によって会場は多くの警官が警戒した。人力車で乗りつけた小松署長に向って、大杉に負けぬ毒舌屋の吉田順司がからかった。

「ご苦労なことだなあ」

「どうも、役目で致しかたない」

小松はマジメに答え、大きなテーブルを一つすえた演壇に上がった。椅子にドッカと腰をおろすと、火鉢を前にしてサーベルをガチャッと床に立てる。吉田順司は

「せっかくですが、臨監はご遠慮上げたいので……とバカでいねいに頭をさげた。

「職権をもって……」

「じゃあ、勝手にしろ」

小池新二郎が壇に立ち、皮肉な司会をしたので小松は目をむいた。

「ここに警官が大分いるようですが、今日の弁士、三田村四郎君はもと大阪玉造署の巡査であるから、とくにそのつもりでご謹聴をお願いする」

テーブルの左側に署長が陣どっているの、出る弁士はみなテーブルの右に大まわりして、演壇についた。そして「かくのごとき横暴」といって、署長を指さしながら実物説明するたびに、署長の額のシワが伸びたりちぢんだりした。

二度中止がつづいたあと、高尾平兵衛が起った。これまで中止をくうと、平公はなぐりかからんばかりの猛烈な勢いで、署長につめ寄った。署長は泰然自若をよそお

って、煙草に火をつけようとした。その手がブルブルふるえるのが、会場の遠くからも見えて聴衆はよろこんだ。

その次に渡辺満三が出たが、中止された。

すると高尾が壇上にあらわれて

「そこをどけ！」

と署長にどなりつけた。

「よその例がどうあろうと、俺は俺だ」

署長がミエを切ったので

「それなら、それでよし」

高尾は引っこんだが、すぐに仕込杖ふりの棍棒を持ってきた。そしてテーブルをはさんで、署長とにらみあった。

「平公いいぞ、やれやれエ」

聴衆席から吉田ピンが声援した。

一大事とばかり警官がかけよって、棍棒を奪いとった。実力行使もしなかった棍棒は、二〇日間の拘留をくらった。

差紙にはこう書いてある。

一、楳丸棒 一本

但シ長サ二尺九寸直径九分

右物件二月一日ヨリ三月二日マデ二〇日間、高尾

平兵衛ヨリ仮ニ領置ス

依ッテ大正一〇年三月二日ニ至リ此ノ書

持参ノ上、該物件ヲ引取ルベシ、

渋谷警察署長 小松己生

労働社の旗あげ

一九二一（大正一〇）年一月、大杉はアナ・ボル協同による第二次『労働運動』を発行した。これに大反対したのが、村木源次郎、宮嶋資夫、吉田一であった。

二月半ば、ピンは神近市子の夫鈴木厚をたずねて、純労働者による労働運動紙の発行を相談した。

それから、青山学院近くにあった神近家の茶の間と玄関を占領して、数人で『労働者』の編集をはじめた。キリストこと久板卯之助も、原稿の整理や挿絵かきを手伝った。

労働者の本拠は、市電大塚車庫近く、巢鴨宮下一七八六の借家であった。三年前、橋浦時雄が住んで「北郊自主会」の本拠にしていた。男二四人、女八人が会員で、月二回研究会をひらいていた。その後は高尾平公と原沢武之助が住んで、自炊していた。

だが警視庁の監視かきびしいので、編集は神近家で発送は宮嶋家であった。

『労働者』創刊号は四月一五日付で発行したが、たち

まち発禁をくった。

ピンと平公たちは上野で演説をしてはパンフを売ったり、渡辺満三のいたナブボルト時計工場の争議を支援したり、高田公三の入営に大小の赤旗やノボリを押立てて見送ったり、布留川桂・北浦千太郎・生島茂・伏下六郎らの入獄祝いのデモを裁判所でくりひろげたり。あばれ放題いいたい放題をつづけた。

やがて、山口県萩出身の砲兵中尉長山直厚が同人にくわわった。シベリヤ出兵中に思想の変化をきたし、帰国後革命運動に投じるようになった。このため彼は翌年二月二日、免官となった。体格のいい、いかにも軍人あがりらしくキビキビした態度で、仲間から「中尉、中尉」と呼ばれた。

四月一二日、高尾は原沢武之助、竹内一郎と足尾銅山争議を応援に行つて捕えられ、宇都宮と栃木に三か月半ほど放りこまれた。高尾は大杉の言動を攻撃していながら、『労働者』の広告欄には『労働運動』の紹介をしており、しかも足尾に持って行ったアジビラは駿河台の労働運動社で刷っている。また、獄中からは近憲にハガキを送っている。今の世のクダラヌ内ゲバとはスケールが違ふ。

この間『労働者』は二号（五月一五日付）、三号（六

月二五日付）、四号（七月二八日付）と、ピンの発行名儀で出していた。

八月四日に高尾が出獄し、ピンは黒耀会の望月桂、曉民会の高津正道と一しよに栃木まで出迎えに行つた。高津坊主は権謀術策の士として、警戒するものが多かった。坊主が接近したのは、いづれピン、平公一派をだきこもうとする根拠があつたからである。

メーデー事件

ああメーデーよメーデーよ

飢餓窮乏の憂いなき

自治労働の新社会

建設すべきわれわれの

志気を天下に示すべき

一年一度の祝祭よ

ああメーデーよメーデーよ

奪いとられし人類の

正義と自由を万民に

回復すべく団結の

威力を世界に示すべき

一年一度の祝祭よ

ああメーデーよメーデーよ

世界をあげて共通の

プロレタリアの祝祭よ

よろこび誇り親愛の

労働勝利のトキの声

大地とどろけ天も呼べ

このメーデー歌は誰が作詞したものであろうか。一九二一(大正一〇)年、第二回メーデーで歌われた。だが、アナ系労組は同じ「ああ玉杯に花うけて」のメロディで、禁止されていた革命歌を高唱した。

芝浦埋立地で、一八団体千余人が大会をひらいた。友愛会側とアナ系組合が衝突した。正午のドンが鳴ると、時計工組合を先頭に、正進会、信友会、デモ行進に移った。上野公園までの途中、いたる所で警官隊が弾圧検束した。あまりの弾圧に激怒した近憲は、上野池ノ端で旗竿を槍がわりに突込んで大あばれした。

メーデーが解散してから、近憲は労働運動社の同志と、神田の松本亭にひきあげた。波茶を飲んで寝そべっていると、錦町署の警官十数人が迎えにきて、近憲をハダシ

のまま持っていった。

そのときオマワリの邪魔をしたかどで、山崎千太郎(信友会)、和田栄太郎(正進会)、中島千八(友愛会)も引っぱられた。また、車坂署長をドブに突落したかどで橋浦泰雄、湧島義法(北郊自主会)、小沢景勝(新人会)も職務妨害で引っぱられた。

このメーデーで、商業新聞にも『労働運動』にも出ていない小事件がおこった。

巢鴨の労働社にはアナ系労働者のあつまりがしだいにふえて、ラジカルな動きを示していた。警視庁は「労働社の不穏分子を一匹もメーデーに出すな」と厳命し、警官隊が家のまわりを包囲していた。

そのとき、吉田ビンラ二、三人が陽動作戦に出て、表道路で警官隊ともみあった。その隙に、新調の旗を持った和田軌一郎が、二階から裏の邸の庭にとびおりた。そしてメーデー会場にかけつけて、演説をぶった。旗は黒地に赤で「労働社」と染めぬいたものである。

顔をつぶされた警察は、労働社の同人を次々に引っぱった。家主はこれ幸いと、警察とグルになって家を釘づけにした。

三人の同志が、家も食い物もなく、真暗な家の中に立てこもった。救援隊が一人一人、カンバを持って出かけ

た。鈴木厚もバン、米、罐詰、佃煮、本や雑誌などを持って何度も補給に行った。

この和田のメーデー脱出事件は、仲間を大よろこびさせた。

金ちゃん、およしよ

第二回メーデーの二日後、夜十一時ごろ、東大赤門前を高等師範三年生の宮之原、小浜、逆瀬川の三人が散歩していた。

そのうしろから、一組のアベックが歩いて行く。男は唐織りの袷に角帯をしめ、銘仙の羽織をひっかけ、一見小粋な商人か職人ふうである。シワがあるので年寄くさく見えるが、形は童顔というトッチャン坊やのような山田金之助であった。年は一八歳。高等小学校を出てから、西巢鴨のナブボルト時計商会の職工をしていた。友達二、三人で浅草公園金龍館の歌劇俳優武田朗ほがら後援会を作ったが、その会費百円を使いこむという、金箔つきの不良少年であった。

つれの女は、隣の洋服裁縫業矢口松五郎の内縁の女房鈴木シマであった。三〇の女さかりで色っぽいが、色あせた銘仙を着て、宿場女郎のような感じであった。

アベックは三人づれを通りぬけようとして、肩がぶつ

かった。

「何をするんだ」

宮之原がどなると、金ちゃんは

「おめえから突きあたったんじゃねえか」

ふところから白さやの短刀を出して、宮之原の胸を突刺した。

「金ちゃん、およしよ」

とシマがとめた。宮之原はすぐ、くず折れた。

「この男は酔っているのだから、君、もうよしたまえ。

短刀をおさめたまえ」

逆瀬川が金ちゃんの手をおさえ、小浜もあやまった。

金ちゃんとシマは、平然とその場を立去った。

逆瀬川と小浜は宮之原を抱きおこして胸から血があふれているのでおどろいた。近くの岡崎病院にかつきこんだが、右肺を一二センチも刺され、絶命していた。

「金ちゃん、およしよ」の言葉と人相から、金の字のつく数人の不良が容疑者として挙げられた。

金之助はその晩、自宅で夜あかしし、あくる四日六時ごろ、小石川区坂下に会社の先輩渡辺満三をたずねた。

それから満三に紹介されて巢鴨宮下の労働社に潜伏した。五日夜八時すぎ、かけつけた本富士署の刑事一三人が、二台の自動車で行ってきた。布団をひっかぶっていた金

ちゃんは、呆気なくオ縄となった。ついでに、いずれも時計工の今井輝吉、吉田幸一、椎野の三人も職務妨害罪で引っぱられた。渡辺は隠匿罪で引っぱられた。

神近家からビンがもどってくると、和田軌一郎がアタフタとかけこんできた。

「オイ、キンちゃんやマンちゃんがしょっぴかれたぞ」

「何をつまらねえシャレをいってるんだ」

「シャレじゃねえよ」

そういつている所へ、また刑事がのりこんできて、二人とも挙げられた。

だが金ちゃん事件にはつながらないので、和田はメーデーのときの職務妨害罪に問われ、吉田は『労働者』の出版法違反で、二九日の間ブタ箱に入れられた。

ロシヤかぶれ

ロシヤ飢饉救済運動

ピンは、ときどき関西へ資金あつめに出かけた。金が入ると、かかえきれないほど食料品を買いこんできて、「ウマイ、ウマイ」と大声をあげて食った。彼の常宿は大坂築港周辺の埋立地にできた市営宿泊所であった。一

金ちゃんは、東京監獄（市ヶ谷）の未決犯房に放りこまれた。そのそばに、メーデー事件でつかまった近衛が入っていた。看守がときどき八監の山田をのぞきこんでは、「金ちゃん、およしよ」とからかっていた。

満さんこと渡辺満三は、一九一九（大正八）年八月、ナポールの賃上争議を機に「時計労働同盟会」を結成した。翌年五月二十九日、二五〇人が大塚クラブで「時計工組合」を結成した。東洋社会党（一八八二年、樽井藤吉ら）の故知にならって、自由要員制を設けた。それから尙工社の時計工小池宗四郎に紹介されて、北風会や労働組合研究会の同人になったのである。

室に二人、銭湯なみの浴場がついていた。（一般の銭湯は二銭だった）夕方六時から翌朝九時までの泊り賃が一〇銭。食堂の晩めしが一五銭、朝めしが一〇銭、合計三五銭あればそんなに不潔でない部屋に安眠でき、風呂に入って食事をしてかせぎに出られた。

ピンが神戸にまわったとき、友人から耳よりな話を聞いた。近藤栄蔵が上海に数千円置いてきたが、誰も物騒がって取りに行くものがないというのだ。ピンはすぐ

に引取りをうけおって、帰京した。

そして、大陸には場馴れしている大胆な高尾が上海に出かけた。その軍資金で国際的な運動をやるうと、岩佐の家に「露国飢饉救済会」の看板を出した。一九二（大正一〇）年一月であった。

この年にはじまるソ連の第一次経済政策は、大きな障害にぶちあたっていた。国内の革命分子との戦い、外国の干渉との戦いなど、七年以上にわたる動乱で、農業生産は戦前の半分にも満たなかった。その上二年つづきの早魃で、ボルガ沿岸地方に大飢饉がおこった。飢えた難民は二五〇〇万といわれ、その二〇パーセント以上が餓死したという。また、この地方の子供の三〇パーセントは飢えとコレラで死んだ。

けれども、資本主義諸国は労農ロシヤを悪魔の集団のように見ていたから、救いの手をさしのべようとはしなかった。わずかにクエーカー教徒を中心とした宗教団体と、各国の労働組合などが救援活動をはじめていた。

一月二十八日、労働組合同盟会の会合で下中彌三郎と松岡駒吉が提唱し、「ロシヤ飢饉同情労働会」が結成された。

労働運動社のある駿台クラブで民衆芸術展をひらいたり、大阪天王寺公会堂で芸術講演会をひらいたりして、

カンパ活動がはじまった。

翌年になると、飢えたロシヤの子供の絵ハガキを作ったり、演説会やデモ行進をしたり、ロシヤ飢饉救済運動は全国的な労働組合の運動となった。

平公は下働きをつづけたが、この運動から手を引き、過激社会運動取締法案反対運動にのり出した。

一九二二（大正一一）年二月、政府は

「近來、我國ニ於テ外国同志ト相提携シテ過激主義ノ宣伝ヲナサントスル者漸ク多ク、シカモコレガ取締ノタメ過激社会運動取締法制定ノ要アリ」と、法案を貴族院に送った。

「第一条 無政府主義共産主義ソノ他ニ関シ朝憲ヲ紊

乱スル事項ヲ宣伝シ、マタハ宣伝セムトシタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス。

前項ノ事項ヲ実行スルコトヲ勧誘シタル者

又同ジ」

司法省はこの法案を緊急勅令ですぐ施行しようとしたが、内務省に反対されて議院に提出することになった。

政府部内のごうした意志不統一のため、貴族院では可決したがいくつか修正され、衆議院では審議未了で流産した。

一九二一（大正一〇）年一月にイルクーツクで極東民族大会をひらくから、日本からも代表数人が出席するようになり、という招きが堺利彦のところに来た。

その話がまわりまわって、大杉栄から和田久太郎をつうじて吉田一にきた。また近藤栄蔵から高尾平公をつうじて、吉田にすすめてきた。

ピンは早速、千葉にひっこんでいた神近をたずね、入ったばかりの原稿料三百円をねだり取った。

それから炭鉱の和田軌一郎、新聞製版工の小林進二郎活版印刷工の北村栄以智をえらび、二百円づつの支度金をもらった。

芝の日蔭町へ行って、一八円のツルシンボの背広を買った。ネクタイのしめかたを教わったが、どうにも面倒くさいので、結んだままの蝶ネクタイを五銭で買ってぶらさげた。

（第二陣として高尾平兵衛、水沼熊、北浦千太郎、秀島秀二、渡辺幸平、白銀東太郎、長山直厚の七人が出かけ、チタで日本軍への反戦運動をおこなった）

一〇月下旬、岩佐作太郎の信認状をもらって、ピンたちは長崎から船に乗った。ベッドに入ってみると、徳田

球一と高瀬清が乗っていた。徳球は日本共産党書記長、高瀬は青年共産同盟書記長という肩書であった。

上海についたが、日本人の宿屋は危いといので、永安公司の五階に泊った。吉田、徳田、高瀬の三人がマリスキイの家をたずね、二百円づつもらって、ヘルビンのロシヤ人ホテルを紹介された。その夜、吉田は姿を消した。仲間が心配していると、ピンは意気揚々と帰ってきた。

「物騒だのに、一人でどこへ行ってたんだ」

「ナアニ、この世の土産にと思って、露助の淫売を買ってきたんだ」

「この野郎、いい気なものよ」

「俺も図体は大きいのが、露助の女もデカイんでおどろいた。すっ裸になってベッドに大の字になると、手まねきしてよ。トッチャス、トッチャスというんだな。何かと思ったら、早く早くって言うわけだ。まるつきり女なんて感じがしねえな」

「それで、あんべいはどうだった」

「どうも、毛深いし、大味でいけねえ」

あくる日、一人づつブラブラと宿を出て、天津に行った。寒かったので、毛布とセーターを買った。当分日本のメシともお別れだからと、味噌漬、梅干、沢庵を買い

こんで汽車に乗った。

長い間汽車にゆられて、やっとヘルビンについた。連絡場所に行くとき、今度はマンチュリーに行けと指令された。

馬車に乗って、真暗な砂漠の中を走った。風が肌を刺すように冷たい。毛布をかぶったり、「俺たちはオカマの趣味はねえんだが」とピンと北浦が抱きあったり、大声で革命歌を歌ったりしたが、寒くてたまらなかった。

一体どこへつれて行かれるのか。ひよっとしたら殺されるのではないかと思っただが、何時間かしてやっと薄明りが見えた。

貨車が停っていた。吉田がコンコンとたたくと、ガラッ戸があいた。

一足先にきていた和田、小林、徳田、高瀬がいた。

「おい、どうした、殺されたかと思っただ。無事でよかった。まず上がってメシを食え」

貨車に入って、肉とジャガ蒔の煮たのやスープなどを食べた。ほかの貨車には朝鮮、アフガニスタン、キルギスタン、インドなどの代表が乗っていた。

二晩くらいして、やっと汽車が動き出した。夜になると、内戦で銃を撃ちあう音がしきりに聞えた。ひどい寒さだった。

駅につくと、みを便所にかけこむ。大便をすると、すぐ凍って尻につかえる。ナタでひっぱたいて落とす。大勢なので、たちまち凍った黄金の山ができる。仕方がないので、男も女も駅の近くの野天にかがみ、オーバーを屏風にして排せつし、そばに積んである乾草で拭いた。

一行は、生活に最低限必要なロシヤ語を一生けんめいおぼえた。

腹がへった（ホーチュエツァ エスチ）

のどがかわいた（ホーチュエツァ ビーチ）

毛布（アジェヤロー）

煙草（パビロースイ）

便所（クラゼイト）

淫売婦（プラスチトゥートカ）

さて、イルクーツクについたが、大会は延期されモスクワでひらかれることになったので、一行はまた汽車に乗った。

ときどき、山の中で汽車が停ると

「コンミュニストは男も女も降りろ」

とふれてくる。降りた連中は、山のほうまでズラリと並んだ。山の上でエン松や白樺の太い木を伐る。それを次から次に手渡す。老婆や子供たちまで、インターナシ

ヨナルを歌いながらそうやって薪を積込んだ。
イルクーツクから一六日かかって、モスクワについた。

ルックスホテルに泊ると、ピンは片山潜に呼び出された。片山の部屋をノックすると、「カムイン」と返事をする。

中に入ると片山と田口運蔵がいた。片山は英語でペラペラと話しかけた。ピンはボカンとして、それから笑い出した。片山も思わず吹き出して、日本語で話し出した。シマスキー（極東共和国人民委員長）、チエレン（サハロフの秘書）、ロシア人はそのほか三人。日本人は片山、田口、吉田。朝鮮、中国、蒙古、ジャワなどの総勢二六人が、大形自動車でクレムリンに向った。

宮殿の入口まで四〇〇メートルほどのダラダラ坂を、防寒毛皮長靴をはいて、数人ごとにスクラム組んで歩いた。雪が踏み固められて灰色になっており、うっかりするとすぐさった。

ジノヴィエフが案内役だった。衛兵が固めている門を入り、兵隊や党員が警戒している大小の部屋を通り、奥まったレーニンの書斎に入った。

金敷めがけてハンマーを振りおろそうとしている労働者の鑄像があった。テーブルが二つあって本が三〇冊く

らい積重ねてあり、原稿用紙とペンが置いてあった。高島素之助の『資本論』もあった。

一行は隣の一二畳ほどの寝室に入った。レーニンは、狙撃されたビストルの弾の摘出手術の余後がよくなくて、療養中であつた。

レーニンは、浅草柳原の古着屋なら二〇円たらずで買えそうな、黒詰襟を着ていた。練馬村からよく大根をかついで売りにくる、田吾作オヤジそっくりであつた。てっぺんは、テカテカに禿げ、鉢巻の下から毛が見えるように、頭のまわりを唐モロコシのような薄赤い毛がチョロチョロと生えていた。彼はピンの膝に片腕をのせて「遠い所をよくきてくれた。時に、日本の労働運動の状況はどうか」とたずねた。

ピンがひととおりの説明をし、片山が通訳した。
「ロシア革命の影響や米騒動による大衆行動の自信から、日本にも革命迫るの気運が高まっている。」

社会主義同盟も結成された。しかし、日本では共産主義の影響は問題にならない。最も勢力をめているのは、アナルコサンジカリズムだ。労働総同盟は数こそふえたが、労資協調のゴマの灰で、戦闘的労働者は見むきもしてゐる。」

レーニンはうなずきながら聞き

「中産階級や知識階級もひっくりかえすため、幅広い協同戦線を作ったほうがよい」と

と忠告し、最後に

「スパシボ（ありがとう）」

と握りしめた。

蒙古、朝鮮、中国と各国の代表が簡単な報告をして、一時間あまりで会見を終った。クレムリンの中を案内されて、一行はホテルに引きあげた。

あくる日一一時ごろ、ピンは田口、徳田、鈴木茂三郎と一しょに片山につれられて、スターリンの部屋に行つた。

スターリンは四三歳の男ざかり、二メートルに近いガツシリした大男で、ルバシカを着ていた。スターリンはいきなり、ピンに聞いてきた。

「君は日本のアナヒスト（無政府主義者）と聞いたが、本当にそうか」

「そうだ」

それからスターリンと、耳学問しかないピンはアナ・ボル論争を午後四時近くまでつづけた。

次の日、またピンとスタは論争した。

「君は一挙にアナヒズム革命がおこせると思つてゐるのか」

「おこせると確信している」

「私は断じておこせないと確信している」

「それじゃあ、その理由を聞こう」

「革命のおきたとき、ロシアのアナヒストたちは偉大な働きをした。ブルジョア政府を倒すときには一しょによく働いてくれたが、ボルシエビキが権力を掌握して組織する段になつたら、アナヒストはそれを破壊する働きをした。」

建設期に、こういうことをされては困るんだな」

「永久革命を目ざすからには、資本の打倒、国家の廃止、あらゆる権力の粉砕のために闘うのは当然だろう」

「われわれは、革命的手段でまずブルジョア資本主義国家から、労働者の国家に転化させる。それから国家権力を消滅させてゆくのが、自然のプロセスだと考えているのだ」

「一体どんなプロセスで消滅できるのか。」

第一、労働者の国家という言葉そのものに矛盾があるじゃないか。国家は支配階級の権力手段が集中したものだ。そして、国家を受けつぐということは、国家権力の行使を目ざす組織を受けつぐことになる。

だが全人民が権力を用いることはできないから、それらの権力はおのずと少数者の手に帰す」

「国家は武装した権力機関だし、廃絶することが理想だ。ソビエト権力は新しい国家権力であり、国家権力であるからには、当然暴力機関だといえる。だが、その暴力は搾取者に向けられたものだ」

「昔から洋の東西を問わず、すべて少数者が権力を掌中にしたとき、ますます強権化し、統制化し、権力が消え去るようなことはない」と実証している」

「資本制社会から共産社会に変革した歴史は、ソビエトのほか未だかつてありえない。過去の歴史で現実を判断すべきだよ。」

無政府共産の理想を追うのに急で、社会建設のプロセスとしての集権化を無視してはならない。必要なのは弁証法的段階論だ。

綱領ももたず、組織も作らず、統一もされずに、君たちは何からどうやって破壊し、そして建設してゆけるのか。小異を捨てて大同につくべきときだ。

権力なき社会を理想とするロシア革命は、今もなお進行中なのだ」

スターリンはしきりにビンを読得した。単純なビンは、とうとうスタ公の詭弁にのせられてしまった。

▲資本主義社会をぶっ倒して、俺たち労働者の天下にするためには、手っとり早くロシア革命のマネをするこ

とだ」と思った。そしてレーニズムに改宗したのである。

数日後の一月二二日、極東民族大会がインターナショナル本部でひらかれた。一五〇人の民族代表が出席した。

ジノヴィエフが議長、ビンが副議長になった。

ジノヴィエフがキンケン声で開会の挨拶を述べたあと、ビンが挨拶するようにいわれ、ドラ声でがなりたてた。

「タワリシチ・スターリンの熱烈なる勧告により、私はアナキストとしての過去のあやまちを悟り、ここにボルシェビキとして新しく出発することを宣言する。」

日本の社会運動の現状は、残念ながらもまだ甚だ微力である。日本労働者独自の力をもって革命をかちうることは、望みなしと断じなければならぬ。

幸いに、諸君のソビエト・ロシアあり。シベリヤから、中国から、油にマッチを添えて援助されんことを願う」

片山が通訳すると、満場の拍手がおこった。

(このあとコミンテルンが作成した議事録には、吉田の発言どころか名前も抹殺されている。)

大会が終ると、ジノヴィエフはビンと徳球を呼んで、アナ・ボル協同戦線を指令した。そして上海の某所で三

千円の運動資金を受取るように、と吉田に信認状を渡した。

だが、その金が吉田一派に渡っては何をされるかわからぬ、と徳球が一足先に上海で受取って帰国してしまっただ。しかも徳球は、「その金を安全のために同行の小林某にあずけたが、小林が恐怖感のあまり帰りの船中で海に投げ捨ててしまった」という。その小林なるものは、どこでどうしているのか、全くわからずじまいであった。

あとから山鹿泰治を引っぱって上海へ資金を取りに行ったビンは、むだ足をふまされてカンカンに怒った。

「それみろ、ボルのやりくちはみんなこうなんだ」と山鹿はいった。ビンは

「あの金は、元来俺に托されたものだ。それを徳球が横領したんだ。野郎、たたきのめしてやる」と

と徳球を追いまわした。

山崎今朝彌が仲介し、鈴木茂三郎がビンを慰撫し、徳球が平あやまりにあやまって、ようやく一件落着した。

その後の「労働者」
『労働者』は一九二一年二月二〇日付で、第八号を高尾の名義で発行している。金ちゃん事件やビン・平公の入露で、廃刊状態であった。

翌二二年、吉田順司と大阪からきていた殿水藤之助が、京橋区新佃西町の布留川桂宅を発行所として再刊した。九号を四月二五日付で、一〇号を五月二〇日付で出した。だが発禁つづきで、ついに倒れてしまった。

駿台クラブの中で、望月桂が「同人図按社」をやっていた。今の商業デザインの草分け、イラストレーターの大元祖である。その仕事場に、殿水が押収をさけるために『労働者』を風呂敷に包んで持込んでいた。

(つづく)

寺島殊雄詩集

わがテロル考

跋 小野十三郎 岡本 潤
・文庫版。390円。5月刊(予約受付中)
・大阪市北区天満橋筋5-95
VAN書房

江西一三自伝

労働運動一筋の生涯

跋 白井新平 高橋光吉
・A5。150頁。5月刊。予価700円
・大阪市西淀川区歌島町1丁目
3-21 江西一三 (〒535)

編集後記

○イオムは本号をもって最終号とする。七三年三月創刊以来三年にわたる読者並びに同志諸氏のあたたかいご支援に心から感謝の挨拶を送る。

○この三年間に11号まで発行したが、イオム会員は関西地方の思春期の若者から七十代まで、広範な年齢層一人名を数えた。また会員外からも延べ二〇名がイオム誌上に執筆参加し、さらに全国の同志から心的、物的両面の支援をうけたのである。

○世代的、地域的な巾広さがイオムの特性であった。イオムを媒体にして、特に京・阪・神地方の新人旧人、先輩後輩あるいは様々な個人的傾向の交流が実現した。これは当初においては期待しなかった成果であった。

○しかし、地域的、世代的及び傾向的な巾広さというイオムの特性が、同時にイオムの限界でもあった。イオムはこれらの差を包含し、その特性を生かすに至らなかった。そして各人はその傾向に従い、その要求を満し、その個性を生かすことのできる人と場を求めた。今、イオムの三年間を経て新しい動向がわれわれの前にある。○ここにおいてイオムは、ひきつづき存在する意味はも

はやないとの結論に達し、廃刊が決定された。イオムの廃刊がわれわれにとって発展的意味をもちうることを希望しつつ。近い将来、新しい別の形でまたお目にかかりたいと思っている。

〔イオム 刊行の足跡〕

- 1号 (73・3) 32頁
- 2号 (73・6) 40頁
- 3号 (73・11) 48頁
- 4号 (74・1) 48頁

(以上残部なし)

- 5号 (74・5) 48頁
- 6号 (74・9) 60頁

(各200円 残部僅少)

- 7号 (74・12) 68頁
- 8号 (75・5) 60頁
- 9号 (75・9) 68頁
- 10号 (76・1) 52頁

(各250円 残部若干)